

映画 *Green Book* 異文化理解を巡る一考察

－アメリカンマイノリティーの抗争と接点－

A Study of Cross-cultural Understanding as Portrayed in the Movie “Green-Book”

－ with Special Reference to the Discord and Rapport of the American Minority －

スミス アンソニー

SMITH Anthony

キーワード：シネマイングリッシュ、グリーンブック、白人救世主、異文化理解

Key words : Cinema English, Green-Book, white savior, cross-cultural understanding

要 旨

2019年発表の映画「グリーンブック」(ピーター・ファレリー監督)は、1962年のアメリカ南部を舞台にしたロードムービーである。ピアニストのアフリカ系アメリカ人と運転手のイタリア系アメリカ人の二人を中心に、人種差別が色濃い南部の当時の状況が描かれる。アメリカ合衆国で共にマイノリティである差別される側の二人が、さまざまな事件を通して、異文化理解を強いられ、自分たちを見つめなおす機会を重ねる。映画の最終場面では、クリスマスイブに、イタリア系アメリカ人の家族団らんに招待されるアフリカ系アメリカ人の姿が、この映画を観る者を救い、過去のアメリカのあり様を回想する。本稿は、この過程を二人のやり取りを引用しながら、分析し、考察するものである。

Abstract

Green Book is a 2018 American biographical comedy-drama film directed by Peter Farrelly.

“Tony Lip” Vallelonga, a working-class Italian-American bouncer becomes the driver of Donald Shirley, an African-American classical pianist on a tour of venues through the 1960's American South. They begin their trek armed with The Negro Motorist Green Book, a travel guide for safe travel through America's racist segregation. The two men find it hard to get along with their opposing views on life and ideals. However, as the incongruous pair witness and endure America's appalling injustices on the road, they find a newfound respect for each other's talents and start to face them together. Upon their return on Christmas Eve, Tony invites Donald to his home. This heartwarming scene offers

the viewers a sense of relief by playing the role of the “White Savior”. This is a story of cross-cultural understanding and it undoubtedly serves as an ideal text for Cinema English.

はじめに：

筆者はこれまでに数本の映画を、「シネマイングリッシュ」という枠組みで、授業や市民講座で取り上げている。また、これらの映画の内容に分析を更に加えて展開し、大学紀要に論文として掲載してきた。そのポイントは二点あり、ひとつは英語の口語表現の生きた事例を取り上げることであり、もう一点は、日本人にはなじみにくい政治や宗教を含めた文化背景を知り、言語理解を深めることにある。

今回取り上げる作品 *Green Book* グリーンブックは、2019年の第91回アカデミー賞の三部門（助演男優賞、作品賞、脚本賞）を受賞したピーター・ファレリー監督（1956～）の映画である。1962年を舞台にアメリカ南部でのピアノのコンサートツアーとそれに伴う宿泊（グリーンブックによる）、そこで展開される差別に関するエピソードを描いてみせる。アフリカ系アメリカ人の天才ピアニストとイタリア系アメリカ人の用心棒を兼ねた運転手の二人のバディフィルムであり、ロードムービーとして描く。脚本に力を貸したのは、トニー・ヴァレロンガ（以下リップと略す）の実の息子であり、この作品は実話に基づいて制作された。

2022年現在、日本の大学生は、父親がケニアにルーツをもつ、バラク・オバマが大統領に就任したことや、BLM運動の高まりを事象としては了解しているだろうが、1960年代のアメリカの人種差別を知ること、現在のアメリカンマイノリティーの状況を理解する一助となることであろう。

1. Green-Book とは何か。

さて、タイトルにもなっている Green-Book は、過去のものとして、今日語られることは少ない。あるいはその存在すら知られていない。いわゆる

黒人差別がまかり通っていた時代に、公共交通機関やレストラン等での差別は、さまざまな場面で語られてきているが、宿泊等に際して、このような手引書があることは、少なくとも日本で語られることはなかった。グリーンブックは、ジム・クロウ法（黒人の公共機関への利用禁止ないしは制限を定めた法律）に基づき作成された、1936年から1967年まで発行された黒人旅行ガイドである。表紙が緑色で、この名前がついているが、その表紙には、「The Negro Motorist Green-Book」と書かれており、当時、「ニグロ」という表現がまかり通っていたことがわかる。

南部を旅行する黒人にとっては、必携であったグリーンブックが、この映画で初めて紹介される場面を引用する。以下、本稿で引用するスク립トは全て、GREEN BOOK Written by Nick Vallelonga & Brian Currie & Peter Farrelly 2018 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC ALL RIGHTS RESERVED¹による。

Record Exec : Here's the deal, Mr. Vallelonga.

It's your job to get Don to all his tour dates on time. If he misses any shows, you're not getting your back-end.

Lip : He's not gonna miss any shows.

Record Exec : Good. And you're going to need this. It's the book I told you about. Sometimes you're staying in the same hotels, and sometimes you're not.

トニー・リップの妻ドロレスも、もちろんグリーンブックの存在をここで初めて知ることとなる。

Dolores : Did you go to the A-A-A for the maps?

Lip : The record guy gave me maps and directions with the itinerary thing. And this.

Dolores : The Negro Motorist Green Book?

Lip : Lists all the places coloreds can stay down south. Like if you're traveling while black.

Dolores : Traveling while black?

Lip : Yeah. Like if you're black but you gotta travel for some reason.

Dolores : They got a special book for that?

Lip : I guess. (24-25)

2. 1962年はどういう年か。

映画の舞台となった1962年を確認しておこう。アフリカ系アメリカ人公民権運動の只中であり、キング牧師、マルコム X、ローザ・パークス等の名前が記憶されるのもこの時期である。公民権の適用と人種差別の解消を法律にもとめていく過程にあった。つまり、1955年のローザ・パークスのモンゴメリー・バス・ボイコット事件から、1963年のキング牧師のワシントン大行進の狭間、前夜だ。公民権法が制定されたのは、ケネディ大統領が暗殺された翌年1964年にジョンソン大統領の下であった。それでもまだ、件のグリーンブックは1967年まで発行され続けていたことも指摘しておこう。

3. ニグロからブラックへ。そしてアフリカンアメリカン。

先に、Green-Book の表紙に、Negro と記されていることを指摘したが、negro という呼称は、やがて、ブラックナショナリズムの *Black is beautiful* に象徴される肯定的な black に取って代わられる表現の時代が来る。そこからルーツを問題とする African-American となるわけだが、colored と white の対比のように、African-American の対比となるのは、European-American なのだろうか。Italian-American や、Irish-American, Jewish-American, Korean-American, Japanese-American と細分化されてきている。Anglo-American という名前を聞かないのは、WASP の彼らが、差別する側にいるからである。イギリス、フランス、に次いで、アイルランドから、その後のイタリアか

らの移民は、それぞれ、白人内差別を受けることになる。安価な労働力となった Irish-American や Italian-American は、一族で固い絆に結ばれながらも、底辺からの上昇をめざす。アイルランド系アメリカ人の立志伝は、ケネディー族のファミリーヒストリーで語られることが多いが、イタリア系アメリカ人の不屈の精神を描いた映画「ロッキー」(*Rocky*) も1970年代のエスニシティを語る上で貴重であろう。

4. イタリアンアメリカンというマイノリティ

先に述べたヨーロッパをルーツとするアメリカ人のうち、とりわけイタリア系アメリカ人は、その歴史と一族の結束や絆が語られてきた。イタリア系アメリカンとして、一般に思い出す人物は、アル・カポネであり、映画「ゴッドファーザー」といった、マフィアに代表される負のイメージかもしれない。あるいは、マドンナやレディガガ、フランシス・ Coppola 監督や、マーティン・スコシッシ監督の名も挙がろうか。イタリア系移民は、WASP を主流とするアメリカ合衆国においては、宗教的には、マイノリティとなるカトリックで、この点ではアイルランド系アメリカ人と共通するのだが、職業選択や社会への関与の違いから、「イタリア系アメリカ人は貧しく無学」というイメージが付きまとった。本映画でも、トニー・リップは、イタリア系移民の典型的な職業のひとつ、腕っぶしの強いキャバレーの用心棒という仕事についていたが、休職を余儀なくされ経済的に追い詰められて、背に腹は代えられない状況となり、黒人天才ピアニストのコンサートツアーの運転手兼用心棒と言う仕事を引き受けている。

本映画で、パトロール中の警官に誰何される場面では、リップは、half nigger と言われる。nigger という表現は、negro が訛ったものであるが、ニュアンスは「黒んぼ」であり、リップは「黒んぼもどき」と位置付けられたわけだ。指摘はないが、このパトロール警官がアイルランド系アメリカ人であっても全く不思議ではない。アイルランド系アメリカ人は、警官や軍隊などに職をもとめ、社

会的な基盤を築いてきた歴史がある。

Patrolman : What's this last name say?

Lip : Vallelonga.

Patrolman : Hell, what kind of name is that?

Lip : Italian.

Patrolman : Oh, now I get it. That's why you driving this boy around ... you half nigger yourself. (85)

(下線筆者)

正しくは you are driving、you are half nigger である。be 動詞を省略してしまうのも無教養な話し方の特徴の一つである。また、boy は、その年齢に関係なく、黒人に対する差別用語である。以下、リップの英語表現について、少し触れておこう。

5. リップの英語とシャーリーの英語

イタリア系アメリカ人の例外にもれず、トニー・リップは無学であり、妻と約束した手紙を書こうにも、綴りがあやしい。Dear を Deer と書いてしまうし、シャーリーのいう plain と plane の区別がつかない。取り違えるだけでなく、expounding の意味もわからず、語彙力も乏しい。

Lip の話し方や言葉遣いは決して丁寧ではない。彼の発音は、そのまま文字で表記されている。gonna は going to、gotta は (have) got to を意味する。

次に、シャーリーがリップに手紙の書き方を教える場面を引用するが、その際、リップが書いていた文書は以下の通りである。

Shirley : May I?

手紙を渡されたシャーリーは音読し始める。

Dr. Shirley : (reading aloud) “Dear Dolores – I’m meeting all the highly leading citizens of the town, people who use big words, all of them, but you know me, I get by, I’m a good bullshitter.”

“As I’m writing this letter, I’m eating potato

chips and I’m starting to get thirsty. I washed my socks last night and dried them on the TV. I should have brung the iron.”

(to Lip) You know this is pathetic, right?

(67)

何が言いたいのか全く分からない、内容のない手紙に呆れたシャーリーは、

Dr. Shirley : Tell me what you’re trying to say.

内容も然ることながら、“I should have brung my iron.” はリップの教養の無さを露呈している。“brung”という単語は存在しない。正しくは“brought”である。リップは、bring brang brung と活用しているであろう。

Dr. Shirley : Tell me what you’re trying to say.

Lip : I don’t know. Just ... You know, how I miss her and shit.

Dr. Shirley : Then tell her that. But try to say it a manner that no one has ever said it.

Lip : Shit ...

Dr. Shirley : And without profanity.

Dr. Shirley : Put this down. “Dolores, when I think of you, I’m reminded of the beautiful plains of Iowa.” Put it down.

Lip : (repeating) “When-I-think-of-you-I’m-reminded-of-the-beautiful ... ”

Dr. Shirley : Plains of Iowa.

Lip : What planes?

Dr. Shirley : The plains. P-L-A-I-N-S. Those big fields we saw.

Lip : Oh, those were nice. (writing) “ ... plains of Iowa – which is what they call big fields around here.”

Dr. Shirley : Tony, no expounding.

Lip : No what?

Dr. Shirley : Just write what I say.

“The distance between us is breaking my

spirit … My time and experiences without you are meaningless to me.”

Lip : (repeating) “ … are meaningless to me.”

Dr. Shirley : Now this … “Falling in love with you was the easiest thing I have ever done.”

Lip : “Falling in love with you was the easiest thing …” This is very fucking romantic.

(67-69)

(下線筆者)

“Language best shows a man” とは 17 世紀イギリスの劇作家、Ben Jonson の言葉であるが、この言葉の意味を実践したのがシャーリーである。映画 Green-Book を通して、英語表現として興味深いのはリップとシャーリーの話し方の基本的な違いである。リップの卑俗的な言葉遣いとシャーリーの洗練された話し方では、余りにも対照的であり、そのちぐはぐなやり取りは、時として独特のユーモアすら生み出す。

リップの話し方がどうしても気になるシャーリーは、次のようにやんわりと提案する。

Dr. Shirley : One more thing – we will be attending many events before and after the concerts, interacting with some of the wealthiest and most highly-educated people in the country. It is my feeling that your diction, as charming as it may be in the tri-state area, could use a bit of finessing. (35)

この申し出に対して Lip は憤慨し、次のように応戦する。

Lip : I don't need no goddamn help. If people don't like the way I talk, they can go take a shit. (36)

Vallelonga という姓についても “Valle will make things easier” (36) と提案され、名前を変えられ

るくらいなら “I'll just wait outside” (36) と告げる。するとシャーリーは妙に納得し、“A sound compromise” (37) と答える。両者の間で繰り広げられるユーモラスでありながら深い意味をもつやり取りの一例である。

6. アイコンとしてのフライドチキン

日本では、ケンタッキー・フライド・チキンは、大阪万博の 1970 年以降ファーストフード店として、マクドナルドと共に成功していると言えるだろう。日本人にとっては、そこにアフリカ系アメリカ人の悲哀は微塵も感じられない。カーネル・サンダースは白人の好々爺だ。この映画で語られる、アフリカ系アメリカ人のソウルフードとしてのフライドチキンの位置づけは、日本人には馴染みのないものである。アメリカ南部のフライドチキンや鯰のフライが、アメリカで一般的な料理となるのは、1960 年代と言われている。この映画の舞台、1962 年では、まだ南部のアフリカ系アメリカ人や、白人でもリップのような貧困層のご馳走であった。白人が食すローストチキンの余った部位を使うフライドチキンを、社会的に成功した富裕のアフリカ系アメリカ人、シャーリーに、フライドチキンを勧める貧しいイタリア系アメリカ人のトニー・リップの執拗さが目立つ。

Lip : This might be the best Kentucky Fried Chicken I ever had. But I guess it's fresher down here, right?

Dr. Shirley : I don't think I've ever met anyone with your appetite.

Lip : No, I bought the bucket so you could have some.

Dr. Shirley : I've never had fried chicken in my life.

Lip : Who you bullshittin'? You people love the fried chicken, the grits, the colored greens… I love it, too. The negro cooks used to make it when I was in the army.

Dr. Shirley : You have a very narrow

assessment of me, Tony.

Lip : Yeah, I'm good, right?

Dr. Shirley : What? No. No, you're not good, you're bad. I'm saying, just because other negro people listen to a certain kind of music doesn't mean I have to. Nor do we all have to eat the same food.

Lip : Whoa, wait a minute. If you said all guineas like pizza and spaghetti and meatballs, I'm not gonna get insulted.

Dr. Shirley : You're missing the point. For you to make the assumption that –

Lip : Doc, you want some or not?

Dr. Shirley : No.

Lip : Tell me that don't smell good?

Dr. Shirley : It smells okay, but I don't want to get grease on my blanket.

Lip : Oooh, I'm gonna get grease on my blankie – have a piece. It ain't gonna kill ya. (51-52)

Who you bullshittin' ? という無学なトニーの英語は、本来 Who are you trying to fool? と言われるべきだ。また、シャーリーの You have a very narrow assessment of me の assessment という語彙は、リップにはない。I'm good, right? という台詞を取って訳すと、俺の言ってることは正しいだろ。つまり、"What I'm saying is correct, right? となる。リップのセリフ Tell me that don't smell good? を直訳すると「良い匂いじゃないと言ってみろ」となるが、"Doesn't that smell good? と言いたいのである。三人称単数の doesn't を使わず、全て don't にしてしまうのも無教養な話し方の特徴である。

また、注目すべきは "ain't" という表現であろう。この文章では、be 動詞の役目をしている。つまり、"It isn't going to kill you. となる。"ain't" の用途は幅広く、例えば "I ain't got no money." では、"haven't" を意味する。

(下線筆者)

7. ロバート・ケネディの口添え

夜、外出していたことで法律に触れて捕らえられる二人は、シャーリーの機転で、ロバート・ケネディに連絡をとり、口添えをしてもらい、釈放される件がある。この僥倖への対応も各自各様であるが、1962年の大統領は、ジョン・F・ケネディである。この映画では、唯一当時の政治的状況が語られ、これからの明るい未来がシャーリーの That man and his brother are trying to change this country という言葉で予言されている。

Lip : Bobby Kennedy just saved our asses ⁱⁱ !
How great is that ?

Dr. Shirley : It's not great – it's not great at all – it's humiliating.

Lip : The hell you talking about? We were screwed and now we ain't.

Dr. Shirley : And I just put the Attorney General of the United States in an incredibly awkward position.

Lip : So what? That's what the guy gets paid for. What else he got to do?

Dr. Shirley : That man and his brother are trying to change this country – that's what else he's got to do! Now he thinks I'm garbage. Calling from some backwoods swamp jail, asking if he can help attenuate assault charges … Who does that? Garbage, that's who. (pp.89-90)

(下線筆者)

当時、司法長官であった Bobby Kennedy の口添えにより難なく釈放され、"How great is that?" と得意気に喜ぶリップに対し、シャーリーは、彼に電話をし、救いを求めた自身の行為を悔い、"it's humiliating" 「屈辱的な行為」と表現する。当然ながら、シャーリーの願いを聞き入れ、暴行容疑を取り下げさせた Bobby Kennedy を "awkward position"、厄介な立場に追い込んだことになる。「この国を変えようとしている」偉大な人物に軽蔑されている筈、と嘆くシャーリーである。

8. 差別されているのは誰か。

話の流れでリップに “so yeah, my world is way more blacker than yours!” (90) と言われ、車から降り、雨の中をさ迷い始めるシャーリー。リップに腕をつかまれ、次のように言う。

Dr. Shirley : Yes, I live in a castle! Alone. And rich white folks let me play piano for them, because it makes them feel cultured. But when I walk off that stage, I go right back to being another nigger to them – because that is their true culture. And I suffer that slight alone, because I'm not accepted by my own people, because I'm not like them, either! So if I'm not black enough, and I'm not white enough, and I'm not man enough, what am I? (92)

(下線筆者)

シャーリーは富裕であっても、アフリカ系アメリカ人としての差別を受けていると自覚しているが、かたや、リップは、白人とはいえ、イタリア系アメリカ人としての差別を受けており、かつ貧しいのだ。白人の中にも階層があることは、アメリカの移民の歴史と宗教（プロテスタントとカトリック）を前提に理解しておかねばならない重要事項である。シャーリーは、成功者として、もはや I'm not black enough であり、もちろん、I'm not white enough, なのである。さらには、I'm not man enough, とさえ言いきる。本稿では触れないが、シャーリーが同性愛者であることが暴露される場面がある。1962年にアメリカで同性愛者であることは、明らかに犯罪者と同一視された。

結局、この映画では、主人公二人が両者とも差別されているのである。

9. クリスマス・イヴと家族団らん

ところで、リップは、この仕事を請け負うにあたり、妻とクリスマスイヴには帰宅することを約

束している。予期せぬ逮捕で時間を無駄にしたリップであったが、是が非でもこの約束を守ろうとする。ここでは、イタリア系でカトリック信者にとってのクリスマスがいかに大切かを再認すべきであろう。そもそも、クリスマスは、キリスト誕生を祝うキリスト教徒にとって最大の祝祭であるが、移民にとっては、異国に在ってとりわけそのアイデンティティを確認する時と場であり、そのためには、一族がその絆を固く誓い合う晩餐でもあるのだ。さりげなくではあるが、実は明確にカトリックを押し出す、画面に映る聖母マリア像や、食前の祈りを習慣とするヴァレロンガ家に戻るという執念は、家庭がないシャーリーをも動かし、最終的には、倒れこんでいるリップに代わりシャーリーが運転する。当初、このイタリア系一族のクリスマスの家族団らんには招待されても邪気なく参加はできないシャーリーであるが、最終的に、家なきシャーリーは戻ってきて歓迎され、リップの妻ドロレスに、イタリア語でクリスマスの挨拶する場面を見ておこう。この「ブオンナターレ」で、連帯が示唆されよう。

Lip : Everyone, this is Dr. Donald Shirley!

Dr. Shirley : Merry Christmas.

Johnny : Well, come on, make some room! Get the man a plate.

Dr. Shirley : You must be Dolores. Buon Natale. Thank you for sharing your husband with me.

Dolores : And thank you for helping with the letters. (113-114)

(下線筆者)

10. 白人救世主なのか

white saviour という表現がある。「白人が、非白人を窮地から救う」という意味であるが、本映画が、まさに、その「白人救世主」の映画だという批評ないしは批判が複数ある。ⁱⁱⁱ 「Green Book グリーンブック」批判の根拠は、無難な黒人キャラクターが独り歩きした『アンクルトムの小屋』

批判にも繋がるだろう。^{iv}白人の都合に合わせて生きる黒人、さらに言うなら、黒人が評価されたり、受け入れられたりするのには、優れた能力をもつおとなしい優等生の場合に限るとのことだ。マイノリティ（アフリカンアメリカン）の系譜は、映画作品でも簡単に辿ることができよう。シドニー・ポワティエが演ずる「優秀な専門性を有する黒人」が主人公の映画 *Guess Who's Coming to Dinner* 「招かれざる客」（1967年 スタンリー・クレイマー監督）は、その典型であろう。また、テレビドラマの *Mission Impossible*^v で登場するアフリカンアメリカンは、メカニックに強いとされるメンバーである。普通の黒人は受け入れられず、特段に優れたもののみが、受容されるのは、もうひとつの名誉白人と言えるかもしれない。映画 “Driving Miss Daisy” 「ドライヴィング ミスデージー」^{vi} では、運転手の黒人は、メカニックに強いことから、職を得られたが、娘は更なる能力に恵まれて大学教授になる。二代かけて「成りあがる」わけだ。さて、前項でも述べたように、本映画では、二人の主人公は共に差別される側の人間である。この映画はむしろ、彼らが究極の空間に置かれた際に生まれる友情や連帯を描いているのであり、その究極の地に追いやったのは、紛れもなく差別する側である。「白人が、非白人を窮地から救う」映画というのは、一元的な見方と言わねばなるまい。ただ、この予定調和とも言えるホワイトクリスマスの大団円に関して、批判的な意見や批評は当然あっておかしくない。

おわりに

この映画は、そもそも、主人公のトニー・リップが、その一族と共に黒人に対する人種偏見を持ち合わせていたことを提示して始まる。

「グリーンブック」を使用してのシャーリーとの旅がなければ、このまま黒人に対する人種偏見のある用心棒にもどったことだろう。リップが職探しを始めた頃の場面にリップの一族が黒人差別をするシーンがある。内装の工事で黒人の職人が二人来ている。リップの父親 Nicola, 兄の Rudy,

Dolores の父親 Anthony、と彼女の兄の Johnny と Louie が来ているのを見て、リップは驚き、何しに来たのかを尋ねる。すると Johnny は目立たぬように黒人たちの方を見て次のように言う。

Johnny : Figured we'd come up and keep Dolores company … (7)

リップは彼の言わんとすることを理解する。すると Dolores の父親 Anthony がイタリア語で次のように言う。

Anthony : You shouldn't be sleeping in the middle of the day, leaving my daughter with these sacks of coal. (7)

sacks of coal とは石炭袋であり、作業中の黒人労働者に対する差別的な呼称である。作業員達に分からないようにイタリア語で語っている。

因みに、Nicola は、「本来、イタリア系に与えられる筈の仕事なのに、何故黒人を雇ったんだ」とリップを避難するが、他の人種に仕事を奪われるとの言い分は、差別を正当化するものである。移民を排斥する際用いられる差別ないしは区別の正当化であり、トランプ前大統領も同様の趣旨を訴えていたのは記憶に新しい。

続いて Lip の父親 Nicola もイタリア語で次のように言う。

Nicola : And why do you hire them to do an Italian's job? It's a disgrace, (7)

Dolores はグラスに lemonade を注ぎ、黒人たちに差し出す。そして彼らが飲み終えたグラスを流しに置く。のちにリップは流しからグラスを取り、ゴミ箱へ投げ捨てる。食後、ゴミ箱に捨てられたグラスを見た Dolores は、グラスを流しに戻し、ため息をつく。

差別がどのように日常でさりげなくされているのかを明示する場面と言えよう。このような偏見を持っていたリップとその家族のクリスマスイブの宴に、映画の最終場面に、シャーリーは招かれたのだ。ここでは、差別される側のイタリア系アメリカ人が、差別する側に回ることがあることも特記すべきことかもしれない。差別は何層にも

なっており、そこには、リップの一族のように、自分たちの言語は少なくとも保持できたものもいれば、洗練された英語を話せても、自らのルーツの言語は話せないシャーリーもいる。

ところで、冒頭と最終場面で重要なのは、差別から解き放たれ、かつ夫リップの手紙がシャーリーの代筆であることを見抜いていた賢明な妻ドロレスの存在である。ドロレス Dolores という名前は、「悲しみのマリア」に由来するので、リビングに置かれたマリア像と重ねることも可能だ。さらには、ドロレスの母性を手掛かりに、この映画を読み解くこともできよう。

リップの一族が、WASP ではないことには、再度注意が必要であるが、白人と黒人が、共にクリスマスイブの食卓を囲んだ光景は、1963年、ワシントン大行進の際に、キング牧師が、“*I have a dream*”の中で語ったスピーチを思い出せるだろう。たとえ、60年近く経過した後も、Black Lives Matter. と言わねばならないのだとしても。

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

引用文献

GREEN BOOK Written by Nick Vallelonga & Brian Currie & Peter Farrelly 2018 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC ALL RIGHTS RESERVED

参考文献 (本文中関連事項参照順)

Rocdiger David R. (1999) 小原豊志、竹中興慈、井川真砂他 (2006) : アメリカにおける白人意識の構築 (第1版)、明石書店、東京
 Berlin Ira (2003) 落合明子、大類久恵、小原豊志訳 ((2007) : アメリカの奴隷制と黒人 (第1版)、明石書店、東京
 Zinn Howard (1980) 猿谷要監修、富田虎男、平野孝、油井大三郎訳 (2005) : 民衆のアメリカ史下巻 (第1版)、明石書店、東京

Moore Tara (2014) 大島力監修 黒木章人訳 (2021) : クリスマス全史 (第1版)、原書房、東京.

高野フミ、板橋好枝、野口啓子他 : 「アングル・トムの小屋」を読む (第1版)、彩流社、東京 (2007)

赤尾千波 : アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ—『国民の創生』から『アバター』まで (第1版)、富山大学出版会、富山. (2015)

杏レラト : ブラックムービーガイド (第1版) スモール出版、東京、2013

ⁱ 引用スクリプト GREEN BOOK Written by Nick Vallelonga & Brian Currie & Peter Farrelly 2018 STORYTELLER DISTRIBUTION CO., LLC ALL RIGHTS RESERVED

ⁱⁱ “save one's ass” は頻繁に用いられる卑俗な slang である。この場合、「ボビー ケネディに危ないところを救って貰えたんだぜ。これって凄いことだよな」と訳すことが出来よう。日本語にも「尻拭い」という表現があるが、“save one's ass” は、「身を守る」、「間一髪で救われる」を意味する。

ⁱⁱⁱ <https://theriver.jp/greenbook-criticism/> 2022年6月3日

^{iv} 無難な黒人キャラクターに関しては、参考文献で挙げた『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ—『国民の創生』から『アバター』まで』(第一章)に詳しい。

^v 1966年から1973年まで放送されたアメリカのテレビドラマ。日本では、1967年からテレビ放送され人気を博した。日本語の題名は、「スパイ大作戦」。主要メンバーの黒人は、電子・機械工学のエキスパートであり、会社経営者という設定。

^{vi} 「ドライヴィング ミスデージー」(1989年ブルース・ベレスフォード監督)では、高齢で富裕のユダヤ系アメリカ人(南部白人女性)とお抱え運転手のアフリカ系アメリカ人というバ

ディフィルムであったが、こちらも実は差別されている Jewish-American と African-American 二人組を描いている。